

令和5年度リージョナルシアター事業  
Regional Theatre Projects  
事業報告書





## 目次

はじめに .....	3
事業概要 .....	4
派遣アーティストプロフィール .....	6
事業の流れ .....	7
各地のワークショップ・トピック .....	8
<b>八戸市南郷文化ホール</b> （青森県八戸市） .....	10
アーティストレポート ごまのはえ .....	14
<b>日立市多賀市民会館</b> （茨城県日立市） .....	16
アーティストレポート 福田修志 .....	21
<b>茨城町</b> （茨城県茨城町） .....	22
アーティストレポート 有門正太郎 .....	27
<b>狛江市立西河原公民館</b> （東京都狛江市） .....	28
アーティストレポート 田上 豊 .....	32
<b>ロームシアター京都</b> （京都府京都市） .....	34
アーティストレポート 多田淳之介 .....	39



# はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業に取り組んでいます。

平成26年度からはじまった本事業は、演劇の表現者(演出家等)を公共ホールに派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業です。各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、学校の授業時間を使って実施するアウトリーチ、幅広い年代の市民が交流するキッカケにするための公募ワークショップ、公立文化施設・自治体職員等が文化事業について考えるワークショップなど、多彩なプログラムとなりました。

この報告書は、「令和5年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者と地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

終わりに、この事業を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業実施にあたり貴重なアドバイスや各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいたアーティスト、その他多くの関係者の皆さまのご協力により、事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

一般財団法人 地域創造

# 事業概要

## 1. 趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホール職員等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者（演出家等）を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

## 2. 対象団体

### ①地方公共団体

②地方自治法第244条の2第3項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体

③地域における文化・芸術活動の振興に資することを目的として設立された、公益財団法人等（②を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの

## 3. 事業内容

派遣された演劇の表現者（演出家等、以下派遣アーティスト）と協働して地域や実施団体の課題やビジョンを基に事業を企画し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

### ①事業日程

原則として3泊4日以内を2回、または5泊6日以内を1回とします。

なお、事業実施に向けて打合せやアウトリーチ先の下見等を1泊2日以内で実施します。

### ②プログラムの実施時間

計840分のプログラムを実施します。

## 【実施時間の考え方】

### 〈プログラムの実施時間〉

下見を除いた派遣において計840分のプログラムを実施することができます。時間の配分は、実施団体と地域創造、派遣アーティストの三者で調整します。規定の時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、実施団体の負担となります。

### 〈学校でのアウトリーチについて〉

学校（小・中・高校等）の授業枠でアウトリーチを実施する場合、1コマの時間は、小学校では45分×2時限（90分）、中学・高校等では50分×2時限（100分）を最小限とします。また、1コマの対象人数は1クラス約30人を目途にしています。

#### 4. 支援措置

##### (1) 一般財団法人地域創造が負担する経費

###### ①派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストの下見、プログラム実施にかかる派遣経費（謝金、交通費、宿泊費等）及びプログラム実施の際のアシスタント2名分の派遣経費（謝金、交通費、宿泊費等）

##### (2) 実施団体が負担する経費

###### ①研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費（交通費、宿泊費等）

###### ②プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費（会場使用料、機材使用料、現地移動費、消耗品等）

###### ③その他

規定の時間や日数を超えて実施する場合の謝金や旅費等の経費

##### (3) その他

派遣アーティストの指定はできません。

#### 5. プログラムについて

各地域の課題に取り組むために、派遣アーティストが地域で演劇の手法を使ったワークショップを行います。学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会や子どもたちを対象にした演劇に触れる時間、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みるなど、地域独自の様々なプログラムを自由に企画していただけます。

# 派遣アーティストプロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、実施団体の企画する事業の内容について、実施団体担当者と共に検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。

## 多田 淳之介（演出家、東京デスロック主宰）



1976年生まれ。神奈川県・千葉県出身。演出家。東京デスロック主宰。現代を生きる人々の当事者性をテーマに古典から現代劇、ダンス、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。地域、教育機関での子どもや演劇を専門としない人との創作、ワークショップ、韓国、東南アジアとの海外コラボレーションなど、演劇の協働力を軸にボーダーレスに活動する。2010年より富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督に公立劇場演劇部門の芸術監督として国内歴代最年少で就任、3期9年間務める。2014年『ガモメ カルメギ』が韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。東京芸術祭共同ディレクター。青年団演出部。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。おもな演出作品に『再生』『ガモメ カルメギ』『ハッピーな日々』『BEAUTIFUL WATER』など。

## 田上 豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）



劇作家／演出家／田上パル主宰。1983年熊本県出身。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。専門は現代劇。移りゆく時代の中で揺らぐ人間やその集団を描き出すのを得意とする。劇団外でも、公共劇場プロデュース公演やダンスカンパニーとの合作、国際共同事業など様々な活動を展開。近年は全国各地の小学生から高校生までを対象にした作品創作を精力的に行い、地域性を生かした演出法に定評がある。創造型、体験型、育成講座まで幅広くワークショップも行う。2019年より富士見市民文化会館キラリふじみの芸術監督を1期3年務める。奈良市アートプロジェクト舞台芸術プログラムディレクター。芸術文化観光専門職大学助教。

## 有門 正太郎（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ主宰）



1975年生まれ北九州市出身。倉本聰主宰「富良野塾」、泊篤志代表「飛ぶ劇場」を経て、2005年「有門正太郎プレゼンツ」を始動。「笑顔になれば何でも出来る」を合い言葉に作、演出も務め全国でワークショップやアウトリーチ活動も行っている。俳優では様々な全国ツアー公演等に参加。高校演劇専科での講師経験を活かし、北九州芸術劇場「日韓合同キャンプ～チャレンジ！えんげき～」の総合演出等も務める。役者として主な出演作品、富良野塾公演『今日、悲別で』『走る』（作・演出：倉本聰）、北九州芸術劇場プロデュース『錦鯉』（作・演出：土田英生）、『江戸の青空』（作：千葉雅子、演出：G2）、時空の旅『シラノ・ド・ベルジュラック』（演出：永山智行）など。

## 福田 修志（劇作家・演出家、F's Company 代表）



1975年長崎市生まれ。劇作家・演出家。長崎大学教育学部卒。1997年にF's Company（フーズ・カンパニー）を旗揚げし、代表と作・演出を務める。心の機微を丁寧に描く作風が特徴で、長崎弁で描かれる作品には独特の温かさが感じられる。劇団外の活動としては、長崎市での市民参加型舞台の経験を活かし、子供から大人までが一緒になって創作を楽しめる空間作りを大切に、地域にある歴史や風習を背景とした作品創作を各地で行っている。また近年では演劇を活用した様々な企画やワークショップを行い、社会の接着剤のような活動も多くなっている。その他、「演劇を長崎の娯楽の一つに」という目標を実現すべく、2018年には長崎市内にアトリエ PentA という小さな劇場を構え、ディレクターとしても活動を続けている。代表作『マチクイの詩』『けしてきえないひ』『ノイジー』。日本劇作家協会九州支部支部長（2024～）。

## ごまのはえ（劇作家・演出家、ニットキャップシアター代表）



1977年大阪府生まれ。劇作家、演出家。1999年自身が劇団代表となって「ニットキャップシアター」を設立。以来、京都を創作の拠点に日本各都市で公演をおこなっている。楽器や仮面など様々な表現手段でイメージーションあふれる表現を追求する一方、「街の記憶」をテーマに地域の歴史や文化を題材にした創作も行っている。2004年『愛のテール』でOMS戯曲賞大賞受賞。2005年自身の故郷大阪府枚方市を題材にした『ヒラカタ・ノート』でOMS戯曲賞特別賞受賞。2022年サハリン（権太）の100年の歴史を描いた『チェーホフも鳥の名前』で希望の大地の戯曲賞「北海道戯曲賞」大賞受賞。得意料理はカオマンガイ。一般社団法人毛帽子事務所所属。

<アドバイザー>

内藤 裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）

岩崎 正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族代表）

# 事業の流れ

## 1 全体研修会

令和4年11月14日（月）～15日（火）

---

## 2 事業内容の調整・下見の調整

派遣先への説明、日程調整

---

## 3 下見派遣（原則1泊2日）

派遣アーティストと地域創造担当者が現地を訪問し、打合せと会場下見等を行う。

---

## 4 事業内容の再調整・派遣先との調整

---

## 5 合意書の締結（三者）

- ・ワークショップ実施日程、内容決定
  - ・経費負担の取り決め等
- 

## 6 1回目派遣（原則3泊4日／2回目派遣と合わせて5泊6日も可）

プログラム実施

（派遣アーティスト、アシスタント×2名、地域創造1～2名）

[1日目] 移動・打ち合わせ、[2日目] 実施1日目、[3日目] 実施2日目、[4日目] 打ち合わせ・移動

---

## 7 2回目派遣（原則3泊4日）

プログラム実施

（派遣アーティスト、アシスタント×2名、地域創造1～2名）

[1日目] 移動・打ち合わせ、[2日目] 実施1日目、[3日目] 実施2日目、[4日目] フィードバック・移動

---

## 8 事業報告書提出（事業終了1ヶ月後）

# 各地のワークショップ・トピック

リージョナルシアター事業は、実施団体と派遣アーティスト、地域創造の三者が対話をしながら、地域やホールの課題や展望を鑑みてプログラムを作っていきます。令和5年度の特徴的なプログラムをご紹介します。

## 演劇ワークショップの手法や効果を共有するプログラム

演劇の手法によるワークショップの内容や効果を体験できるプログラムを実施しました。行政職員、教職員、事業実施団体職員、地域で活動する表現者等を対象にワークショップを実施し理解を深めました。



劇団員向けワークショップ（日立市）



行政職員向けワークショップ（茨城町）

## 学校の授業時間で行うアウトリーチプログラム

子どもへのアプローチとして、学校の授業時間内で演劇の手法によるワークショップを実施しました。想像力を使うプログラムで、子どもたちも先生も、普段の授業では見られないクラスメイトの新たな一面を垣間見ることができました。



小学校アウトリーチ（日立市）



小学校アウトリーチ（茨城町）

## 高齢者を対象にしたプログラム

高齢者が日頃から集まって活動している場所で、演劇の手法によるワークショップを実施しました。演劇をとおしてお互いをより知ることでコミュニティの中での関係が深まり、また、ホールとの新たな関係性をつくることができました。



「ともつくカフェ」でのワークショップ（京都市）



岡崎学区社会福祉協議会「いどぼたサロン」でのワークショップ（京都市）

## 地域の資源を活かしたプログラム

約50年の役目を終える大ホールやその周辺を歩き、思い出の場所として振り返りながら新たな文化施設への理解を促すプログラムや、地域の商店街の店主の人生を聞き取り台本にして、街中の古民家でリーディング公演するプログラムを実施しました。ホールへの関心やこれまでつながりのなかった人と人をつなぐことができました。



まち歩きワークショップ「大ホール探検ツアー」  
(茨城町)



「常陸多賀商店街劇場～短編演劇作品集」(日立市)

## 演劇の創作をとおして交流を図るプログラム

プロの演出家、普段あまり交流のない他校の生徒、ホールスタッフとの新たな交流の創出、新たな活動のきっかけ作りを目的として、高校生を対象に短期集中で演劇の創作を体験するプログラムを実施しました。新しい仲間との出会いや、演出家やホールスタッフとの活発な交流を生み、色んな人と協力して創作する楽しさを改めて知ってもらうことができました。



高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～(八戸市)



高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～(八戸市)

## ホールの魅力を感じてもらうプログラム

本格的な照明・音響設備のホールや諸室の魅力を地域の人たちに知ってもらうため、対象年齢を分けて様々なプログラムを実施しました。親子対象で施設のあらゆる場所を利用し各部屋を巡りながら創作のプロセスを体験する回遊形式のプログラムではホールや諸室の魅力を発信し親しみを持ってもらうことができました。



西河原劇場「ホールであそぼう」①～演劇にふれよう～(狛江市)



西河原劇場「ホールであそぼう」⑤～西河原アドベンチャー～(狛江市)

## 八戸市南郷文化ホール（青森県八戸市） 実施データ

実施団体	株式会社アート&コミュニティ
実施ホール	八戸市南郷文化ホール
担当者	春日千春
実施期間	下見派遣 令和5年5月24日(水)～5月25日(木) 1回目派遣 令和5年8月9日(水)～8月12日(土) 2回目派遣 令和5年12月8日(金)～12月11日(月)
アーティスト等	アーティスト：ごまのはえ アシスタント：大路絢か、藤枝優希、越智良江（2回目派遣）
<p>■下見派遣内容</p> <p>5月24日(水) 打合せ、ホール下見、八戸東高校演劇部視察・打合せ 5月25日(木) 打合せ、地域資源視察</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>8月10日(木) 10:00～15:00 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～① ※ホール職員によるバックステージツアーあり 8月11日(金・祝) 10:30～15:00 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～②</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>12月9日(土) 10:00～15:30 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～Part2 ① ※ホール職員によるバックステージツアーあり 12月10日(日) 10:00～15:00 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～Part2 ②</p>	

## スケジュール

派遣	下見		1回目				2回目						
月日	5/24(水)	5/25(木)	8/9(水)	8/10(木)	8/11(金)	8/12(土)	12/8(金)	12/9(土)	12/10(日)	12/11(月)			
9:00	移動	打合せ	移動	準備	準備	地域資源視察	移動	高校生演劇体験WS Part2 ①	準備	準備	地域資源視察 昼食		
10:00				高校生演劇体験WS ①	高校生演劇体験WS ②				高校生演劇体験WS Part2 ②				
11:00				地域資源視察	移動				フィードバック	移動		フィードバック	移動
12:00													
13:00													
14:00	打合せ 会場下見	移動	打合せ 会場準備	移動	移動	移動							
15:00													
16:00	八戸東高校演劇部見学・打合せ	移動	移動	移動	移動	移動							
17:00													
18:00	移動	移動	移動	移動	移動	移動							
19:00													
20:00													
21:00	移動	移動	移動	移動	移動	移動							
21:00													

## プログラム詳細

### 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～①

8月10日（木）10:00～15:00

会場：八戸市南郷文化ホール

参加者：23名

講師、スタッフ、受講生の自己紹介の後、アイスブレイクを兼ねたワークを行い、舞台上での姿勢や視野、声の出し方、イメージしたものを表現し共有することについて体験しました。特に綱渡りのワークでは、高さや風、気温等をどう表現するか、講師からのアドバイスを受けながら、試行錯誤していました。

作品創作に向けての脚本の読み合わせの後、ホール技術スタッフによるバックステージツアーを行い、調整室や楽屋等の舞台裏等を案内し、舞台機構や音響機器、照明機器についてスタッフから説明しました。

午後からは舞台、客席、ロビーの3チームに分かれて作品創作を行いました。創作シートを基に意見交換を行いながら、演出担当と俳優担当、配役、客席エリアをそれぞれ決定していきました。



### 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～②

8月11日（金・祝）10:30～15:00

会場：八戸市南郷文化ホール

参加者：23名

スケジュールを確認した後、3チームに分かれて創作の続きを行い、午後は舞台、客席、ロビーの順で作品を発表しました。

同じ脚本を、それぞれ異なるエリアで、限られた条件下でどのように表現するか各チームで試行錯誤し、それぞれが会場の特性を生かしながら、工夫を凝らした演出を行いました。特にロビーでは、階段の使用や玄関からホールの外へ出る演出を行い、照明が使用できないながらも工夫して場面転換を行っていました。

作品発表の後、それぞれの作品を見た感想や意見を伝えあうことで、観劇の感想と創作体験を共有しました。創作チーム内だけでなく、他のチームの人と感想や意見を共有することで、受講生間の交流にもつながりました。



### 高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～ Part2 ①

12月9日（土）10:00～15:30

会場：八戸市南郷文化ホール

参加者：10名

講師、スタッフ、受講生の自己紹介の後、アイスブレイクを兼ねたワークを行い、舞台上での姿勢や視野、声の出し方、イメージしたものを表現し共有することや演出家の役割について学びました。

午後からは4チームに分かれて作品創作を行いました。創作シートを基に意見交換を行いながら、演出担当と俳優担当、配役、舞台エリア、客席エリアをそれぞれ決め、舞台エリアは舞台袖、客席、楽屋、屋外に決定しました。

最後にホール技術スタッフによるバックステージツアーを行い、調整室や楽屋等の舞台裏等を案内し、舞台機構や音響機器、照明機器についてスタッフから説明しました。受講生が実際に照明卓を操作する場面では、歓声が上がっていました。



高校生対象演劇体験ワークショップ～俳優・演出編～ Part2 ②

12月10日（日）10:00～15:00

会場：八戸市南郷文化ホール

参加者：10名

スケジュールを確認した後、4チームに分かれて創作の続きを行い、午後は舞台袖、客席、楽屋、屋外の順で作品を発表しました。今回の脚本は国境を挟んで兵士が会話するというものであるため、客席が舞台エリアのチームはソーシャルディスタンス用の座席カバーを配置し、楽屋が舞台エリアのチームはペットボトルや紙などのゴミを中央に配置するなどして、国境をそれぞれの場所で工夫して表現していました。観客に効果音を声で表現してもらった演出を行うチームもあり、同じ脚本でありながらも、場所や演出によって作品の印象が大きく変わることには驚きました。

作品発表の後、同じ役柄・演出家同士、違う役割の人と順番で感想を述べあい、受講生間で感想や意見を共有しました。感想や意見を共有することによって、それぞれの脚本に対する解釈や創作のプロセスを知るとともに、受講生間の交流も深まり、有意義な時間になったと思います。



## 担当者の報告・評価

---

### ●この事業への参加動機

八戸市はかつて「演劇の街」と呼ばれており、多くの劇団や芝居小屋が存在していましたが、近年では少し下火になってきている状況です。ホールとしても演劇文化の継承に寄与したいと考えておりましたが、これまで音楽やダンス公演のワークショップが中心であったため、どのようなアプローチをしたらいいのか、また、当ホールが高校演劇の地区大会の会場になっていることから、ホールとして演劇を用いた取り組みを実施できないかと思案していたところでした。

この事業を通じて、演劇のワークショップの進め方、またどのようなことができるのかをホールとして学ぶとともに、これまでアプローチしたことのない層や団体へのワークショップを通じて、ホールの認知度を上げ、新規利用者の開拓、さらにはホール所在地の南郷に足を運んでもらうきっかけにつなげたいと考え、参加しました。

### ●企画・実施において苦労した点

地域・ホールの課題をワークショップにどのように落とし込むのがイメージできず、不安な気持ちで研修会に参加しましたが、ごまのはえ氏や地域創造スタッフのアドバイスもあり、ホールに足を運んでもらいたい層の1つである高校生を対象にした、演劇ワークショップを実施することに決定しました。

ワークショップは8月と12月の2回開催しましたが、12月は大会に向けての稽古や進路関係の行事と重なっていたため、参加者がなかなか集まらず苦労しました。急遽2日間参加必須のプログラムを1日単位で参加可能とし、申し込みのなかった高校の演劇部に直接連絡するなどして参加者を募りました。8月に参加していただいた高校の演劇部顧問の先生が、各校に宣伝してくださったこともあり、最終的に10名の参加申し込みがありました。幸いにも申込者全員が2日間参加可能であったため、当初の予定通りのプログラムを実施することができました。急なプログラム変更のご相談も関わらず、ごまのはえ氏を始めとする講師の皆様、地域創造スタッフの皆様には臨機応変にご対応いただき、大変助けられました。

### ●プログラムを実施した成果

今回のワークショップはコロナ禍明けでの開催ということもあり、コロナ禍においては難しかった学校の垣根を越えた交流も目的としていたため、グループ分けは同じ学校で固まらないようにランダムに設定しました。参加者からも「他校の演劇部と関わる良い機会になり、様々な演出の手法を学ぶことができ参加してよかった」や「緊張したり意見を言ったりするのに戸惑ったが、短い時間で少しでもいいものをつくりあげようと協力することができ良い体験になった」等の感想をいただき、ワークショップを通じて交流の機会を創出できたことは、非常に良かったと思います。

また、ホールの技術スタッフがバックステージツアーを実施し、舞台機構や音響卓、照明卓の説明を行うほか、作品創作の際には技術的な面でのサポートを行いました。スタッフが学生と交流する機会を持つことができたので、今後の地区大会や自主公演において、学生が気軽に相談できる環境づくりにもつながりました。

### ●今後の展望

高校生対象のワークショップを初めて実施するにあたり、どのようにしたら学生が参加しやすいかを高校の先生に相談しながら進めましたが、今回の事業が、今後のワークショップ開催に向けてのベースづくりにつながったと感じています。今後もこのような取り組みを行っていきたいと考えておりますが、地元の演劇関係者の方にもアシスタント等で参加していただくことで、ワークショップの新たな手法を取り入れる機会を創出し、地域に還元できるようにしていけたらと思います。

### 演劇による交流

ごまのはえ

下見の際に感じたのは八戸市の文化施設の多さだ。市の中心部には八戸ポータルミュージアム「はっち」をはじめ八戸市公会堂、八戸市美術館、八戸市立図書館などがあり、どれも市民が集う場として活用されている。派遣先の南郷文化ホールは市の中心部から車で30分ほど離れている。ホールの隣には図書館があり、近くの道の駅にはジャズをテーマにした施設もある。市中心部だけでなく離れた場所にも文化施設が複数あることに驚いた。

南郷では数年前まで「南郷アートプロジェクト」という事業で、様々なアートイベントが行われ、文化ホールでも地元の歴史から題材を得た市民劇を創作するなど大いに盛り上がったようだ。ただアートプロジェクトが終わってからは、ホール利用者も固定化しつつあるのが現状で、今回の派遣はもう一度南郷文化ホールを「集いの場所」として機能させること、その為に事業実施力をさらに高めることが大きな狙いだった。

研修会で練り上げた企画目標は次の二つだ。

- ①高校生たちの学校の垣根を越えた交流の機会を設けたい。
- ②高校生たちに南郷文化ホールに親しみを感じてもらいたい。

この二つの目標に対する手段として、高校生たちが2日間かけて小作品を創作発表するワークショップを企画した。

他校の生徒と2日間創作を共にすることで学校の垣根を越えた交流が自ずと生じるだろうし、創作発表する場所を舞台上に限らず、客席や楽屋やロビーにすることで生徒たちにホールを観察する気持ちにさせ、ホールへの親しみにつながるよう工夫した。

準備段階では、参加者が同じ学校の生徒ばかりにならないように担当者の方に市内の学校に偏りなく声をかけて頂いた。結果、複数校から応募があった。ワークショップの時間配分は高校生同士が感想を述べあう時間を長く設定し、出来るだけ少人数で気持ちを伝え合う場（それでいて色んな人と話ができる場）になるように心がけた。また、ホールの技術スタッフ陣と参加者が話す機会も多く設けた。ワークショップの終了時には参加者同士でLINEアドレスを交換する姿も多数見られた。改めて演劇が持つ交流を促す力を実感した現場だった。また、ワークショップでは、高校生たちに「どこを客席にするか？」を考えてもらった。普段の活動ではあり得ない選択肢を提示できたと思う。このことが彼女らの今後の演劇活動に少しでも変化をもたらしてくれたらと願っている。

今後の事業展開については、やはり南郷の地理的条件をどう活かせるかがポイントだろう。今回のワークショップでは市中心部からシャトルバスを運行させたが、諸条件が許せば宿泊を前提にした事業なども面白そうだ。また、市中心部から南郷に向かうバスの車内を会場にワークショップするのも面白い。「はっち」に滞在する表現者の力も借りるなどして、是非とも事業を継続させてほしい。



## 日立市多賀市民会館（茨城県日立市） 実施データ

実施団体	公益財団法人日立市民科学文化財団
実施ホール	日立市多賀市民会館
担当者	大貫達也
実施期間	下見派遣 令和5年6月14日(水)～6月15日(木) 1回目派遣 令和5年11月15日(水)～11月18日(土) 2回目派遣 令和6年2月9日(金)～2月12日(月)
アーティスト等	アーティスト:福田修志 アシスタント:松本恵、田中俊亮、樋口ミュ、志賀亮史(2回目)、越智良江(2回目)
<p>■ 下見内容</p> <p>6月14日(水) 全体打合せ、田尻小学校下見・打合せ、商店街視察</p> <p>6月15日(木) 市内視察、宮田小学校下見・打合せ、全体打合せ、ひたち街角小劇場劇団員との顔合わせ</p> <p>■ 1回目派遣内容</p> <p>11月16日(木) 13:45～15:25 日立市立宮田小学校アウトリーチ(4年2組)</p> <p>11月17日(金) 8:35～10:10 日立市立田尻小学校アウトリーチ①(5年1組) 10:30～12:05 日立市立田尻小学校アウトリーチ②(5年2組)</p> <p>■ 2回目派遣内容</p> <p>2月10日(土) 11:00～15:30 街歩きワークショップ「ひたちっ子わくわく劇場 まち歩きナゾさがし」</p> <p>2月11日(日) 10:00～11:00 親子向けワークショップ「ひたちっ子わくわく劇場 紙であそぶ桃太郎」 14:30～15:00 常陸多賀商店街劇場～短編演劇作品集～ 17:00～18:30 劇団員向けワークショップ</p>	

## スケジュール

派遣	下見		1回目				2回目					
月日	6/14(水)	6/15(木)	11/15(水)	11/16(木)	11/17(金)	11/18(土)	2/9(金)	2/10(土)	2/11(日)	2/12(月)		
9:00	移動	市内視察	移動	打合せ	田尻小学校 アウトリーチ ①	フィード バック 打ち合わせ	移動	街歩き WS 「まち歩き ナゾさがし」	準備・稽古	移動		
10:00					田尻小学校 アウトリーチ ②						「紙であそぶ 桃太郎」	フィード バック
11:00					宮田小学校 アウトリーチ						商店街劇場	移動
12:00												
13:00	全体打合せ	市内視察	打合せ	宮田小学校 アウトリーチ	取材②	移動	打合せ	街歩き コース確認	親子向け WS 稽古	劇団員向け WS		
14:00											取材①	
15:00											会場下見	
16:00	田尻小学校 下見・打合せ	宮田小学校 下見・打合せ	打合せ	打合せ	打合せ	取材③	街歩き コース確認	親子向け WS 稽古	劇団員向け WS			
17:00	商店街視察	全体打合せ										
18:00		ひたち街角 小劇場 劇団員との 顔合わせ										
19:00												
20:00												
21:00												

## プログラム詳細

日立市立宮田小学校アウトリーチ

11月16日（木）13:45～15:25（4年2組）

会場：宮田小学校 多目的室

参加者：34名

日立市では、音楽・科学などのアウトリーチは行なっているものの、演劇アウトリーチは今回初めての実施となりました。

前半は、プロの役者による生の芝居「宝探し」の観劇や心体をほぐす準備運動の後、全員で一つの円になって、見えないボール回しを行ない、頭の体操を行ないました。笑い声が絶えず児童全員が元気に取り組む姿が印象的でした。

後半の「物語を生み出すワークショップ」では、グループに分かれ、配役カードを配り、一人一人が登場人物になりきり、風景の写真から物語を創作しました。

前のめりになりながら、配役カードから浮かぶインスピレーションを基に、のびのびと自分の意見を言う児童たちの姿、グループの仲間の意見をしっかりと聞き、物語を創作していく過程は、児童たちの新たな発見と気づきの場となりました。

担任の先生からは、「普段は見るできないハキハキとした声やいい表情を見ることができた」との感想をいただきました。



日立市立田尻小学校アウトリーチ

11月17日（金）8:35～10:10（5年1組）

10:35～12:05（5年2組）

会場：田尻小学校 多目的室

参加者：5年1組／31名、5年2組／31名

同じプログラムの内容でしたが、初日の宮田小学校とは異なり、前半は緊張した様子からだんだんと緊張がほぐれていく様子がわかりました。

後半の「物語を生み出すワークショップ」では、完成した物語の精度を高めようと互いに声を掛け合いながら、発表前まで自主的に練習をする場面が見られました。

発表では、台詞だけでなく、自然と体で表現する姿も印象的でした。

福田さんの「演じるだけが表現ではなく、見ている方も笑う・感動するなどの表現をしている」というメッセージが印象に残っています。

終了後、生徒たちの達成感に満ち溢れた表情には心打たれました。

フィードバックでは、担当の先生から児童たちの変化に驚いたという意見、ワークショップの感想と共に、福田さんへ様々な質問が出され、再度実施を望む声もありました。

課題の一つであった、現場の先生の理解を得ることについても大きな成果となりました。



### 街歩きワークショップ「ひたちっ子わくわく劇場 まち歩きナゾさがし」

2月10日(土) 11:00～15:30

会場：多賀市民会館 小ホール及び多賀地区周辺

参加者：6名

小学3年生から中学2年生と保護者を対象に公募したワークショップ。午前中は、参加者同士の仲を深めるため、自己紹介とコミュニケーションゲームを行ない、参加者同士の交流を図りました。

その後、多賀の街を歩きながら、不思議に感じたものや面白いと思っただけのものを見つけて自由な発想で写真を撮りました。

午後からは、撮影した写真にそれぞれがイメージしたことをもとに「謎ワード」を考えました。

会場を街歩きコース通りに再現し、写真を配置し、書き出した「謎ワード」はどの写真なのか、参加者全員で解答用紙を持ち謎解きをしました。

同じ場所の写真でも人によって感じ方が全く違うため、終始驚きや気づきの多いワークショップとなり、答え合わせはとて盛り上がりました。

また、昨今の車社会の影響もあり、大人になるとゆっくりと街を歩くことがないため、参加した保護者を含め、会館職員にとっても、街の新たな発見ができた良い機会となりました。



### 親子向けワークショップ「ひたちっ子わくわく劇場 紙であそぶ桃太郎」

2月11日(日) 10:00～11:10

会場：多賀市民会館 小ホール

参加者：24名

対象の世代を広げること、幼い年代から普段体験できないことをホールで体験して欲しいという思いから、園児から小学校低学年を対象とした親子で楽しめる体験ワークショップを実施しました。

まず小道具が何もなく、鬼に負けてしまう桃太郎を観劇。戸惑う子どもたちに、「ちがう」という気づきと桃太郎が勝つために何が必要かを考えてもらい、それぞれ刀やきび団子などの小道具を親子で作りました。

その後、作った小道具を全部使って、鬼に勝つ物語を再度観劇しました。

親子で夢中になって小道具を制作する姿はとて印象的であり、中でも好奇心から様々な小道具制作に取り掛かる子や一つの小道具を黙々と精度を高め続ける子と多種多様な様子が伺えました。

また、桃太郎役として地元の劇団員にも演じていただきました。プロの役者との共演は、劇団員にとってもいい経験になりました。

本プログラムは、短時間で体験と鑑賞をできる内容であり、物心がつき始めた園児から小学校低学年にはぴったりであると共に、新たな層の開拓となるワークショップとなりました。



## 常陸多賀商店街劇場～短編演劇作品集～

2月11日(日) 14:30～15:00(取材:①11月15日(水)②③11月17日(金))

会場:かどや

参加者:6名(出演者)※来場者:40名

地元商店街の方々の半生を取材し、朗読劇で上演する企画を実施しました。地元の商店街とひたち街角小劇場を繋ぎたいという思いから、地元の劇団員に出演してもらいました。

脚本は福田さんに執筆していただき、3作品(薬局、洋服店、洋菓子店)をアシスタントの樋口さん、越智さん、志賀さんにそれぞれ演出をしていただきました。

取材では各店舗に伺い、30分程度お話を伺いました。普段は寡黙で職人気質な店主も、福田さんの物腰が柔らかい取材にだんだんと心を開き、なかなか聞くことができない昔話からプライベートな話まで伺うことができました。

取材から地元の劇団員に同行してもらい、お店のイメージを掴んでもらうと共に、地元商店街の皆さんと繋がる良いきっかけとなりました。

会場は、下見及び事前打ち合わせの段階で、「商店街の話なので、街にあるスペースが良い」ということになり、昔はアイスクャンディーが有名で市民の憩いの店だった古民家「かどや」で実施しました。

客席はほぼ満席で、普段のホールで実施している公演では見かけない方々にご来場いただきました。

3作品とも人情味溢れるストーリーで、来場者からは「街を歩くのが楽しくなりそう」、「他の店のお話も聞きたい」など続編を望む声を多数いただきました。

作品となった洋菓子店は、会場の近くであったため、お客様が終演後に洋菓子店に立ち寄る姿が多く見受けられました。

今後もひたち街角小劇場と地元商店街の合同企画は継続し、「ひたち街角小劇場」、「地元商店街」、「多賀市民会館」が協力し合い、街全体を盛り上げられる様な関係性を構築していきたいと考えています。



## 劇団員向けワークショップ

2月11日(日) 17:00～18:30

会場:多賀市民会館 小ホール

参加者:13名

今年度から会館を会場として、自主的にワークショップを実施するなど、積極的に活動している地元の劇団員を対象として、更に新たな可能性を見出して欲しいという思いからワークショップを実施しました。

参加者同士及び福田さんをはじめとしたアーティストの皆さんともリージョナルシアターのプログラムを通じて、関係性を築いていたこともあり、前半から終始和やかな雰囲気でした。自己紹介の後、福田さんより、今回リージョナルシアターで実施したプログラムの紹介について、目的などを交えて説明がありました。

その後は、福田さんが実際に行なっている、「特定の単語のみで相手に伝えるプログラム」と「言語を使わず身体表現でしりとり」、「演技力で待ち合わせするプログラム」を行ないました。

伝える大切さを学んだ劇団員から、終了後に福田さんへ質問する姿を見ることができました。

今回のワークショップで学んだことを活かして、今後のひたち街角小劇場の活動の幅を広げてもらえるのではないかと期待しています。



## 担当者の報告・評価

### ●この事業への参加動機

当財団では、平成23年より、幅広い世代の市民が演劇に触れることができる機会を増やす目的から、日立市内外のアマチュア劇団を支援する「ひたち街角小劇場」を実施してきました。方針として、公演の企画の段階から市民にアイデアをいただき、「多賀市民会館に来れば、様々な演劇が楽しめる」をコンセプトに事業を進めています。

昨今の人口減少により街全体が勢いを失いがちな現状において、演劇の持つ力をどう活かしていくか、また、「演劇×若者・子ども」に取り組むことで若者にとっての地域の魅力向上と子ども達にとっての新しい自己発見による健全育成の両立を図ることが大きな課題と捉えています。

目標に掲げている「演劇のまち常陸多賀」に向けて、どのような手法があるか可能性を探り、プロの演出家との出会いから、組織に新しい風を吹き込み「ひたち街角小劇場」の可能性を拡げていきたいと当事業へ申し込みました。

### ●企画・実施において苦労した点

アウトリーチを実施する学校の調整に最も苦労しました。

当市では、既に音楽や科学などのアウトリーチは定着しています。その中で、演劇の手法を用いたアウトリーチは、初めての試みであったため、内容やどういった効果があるかなどをうまく理解してもらえませんでした。また、日立市内の小学校のほとんどが、前年度の年末にはスケジュールを確定してしまっており、アウトリーチを実施する学校がなかなか決定せず苦労しました。

さらには、商店街劇場で作品となったお店とは、元々繋がりはあったものの、初めての取り組みであったため、企画の説明や意図を的確に伝えることが難しく、プログラムについてなかなか理解を得ることができませんでしたが、資料を作成した上で何度か足を運び、無事企画実現となりました。

### ●プログラムを実施した成果

今回、5つのプログラムを実施し、今まで対象としていた世代からそうでない世代まで、幅広い世代へアプローチすることができました。

その中でも、これまで対象としていなかった園児対象プログラムが一週間たらずに満員となり、新たな需要を発見することができました。一方で当日キャンセルも多く、企画実施の難しさを肌で感じました。

2種類の公募ワークショップに「ひたちっ子わくわく劇場」という企画名を採用しました。当館が毎年実施している演劇ワークショップの集客の悩みから、一般的に馴染みのない「ワークショップ」をやめ、参加意欲が期待できる「わくわく」と日立の子ども向けで「ひたちっ子」、演劇要素を残すため「劇場」から命名したところ、応募の反応は良く、企画担当として客観的な立場から物事を考え、柔軟な発想と企画スキルを学ぶことができました。

アウトリーチでは、前述したとおり実施するまでの調整に大変苦労しましたが、子ども達のいきいきとした姿や台詞だけでなく自然と身体を使って表現する姿に、演劇アウトリーチが当財団の実施するアウトリーチ事業の中心となる可能性を大いに感じました。

その他のプログラムでも新規の参加者及び来場者に来てもらい、当館の取り組みについて知ってもらい良い機会となりました。

担当として、リージョナルシアターを手掛けていく上で、福田さんをはじめアーティストの皆様、地域創造の皆様から学んだことは、固定観念にとらわれず、広い視野、自由な発想で物事にチャレンジする大切さです。今回学んだことを活かし、幅広い年代の方々に楽しんでもらえるようなプログラムを今後も展開していきたいです。

### ●今後の展望

今回のリージョナルシアター事業を通じて、新たな発見や可能性を探るいい機会となりました。

まずは、演劇に対する抵抗感や敷居の高さを拭い、会館へ足を運んでくれる方を増やせるよう、今後も演劇を通じたプログラムを幅広い世代へ継続して提供していき、多賀市民会館が交流の拠点として定着し、「演劇のまち常陸多賀」を目指して日々邁進していきたいです。

また、小学校のアウトリーチについても、様々な課題をクリアしつつ、演劇の手法を用いたアウトリーチが定着できるよう、継続して取り組んでいきたいです。

### 人と繋がる劇場へと踏み出した一歩

福田修志

かつては鉱山の街として栄えた日立市の中にあり、海と山を感じられる穏やかな街。というのが日立市多賀町に対する僕の最初の印象でした。ですが、街の人が抱いている街の姿はそれとは少し違って、常陸多賀駅の近隣にある商店街は、昔は大層賑わっていたと寂しそうに話していました。

そんな街にある多賀市民会館は、常陸多賀駅から少し歩いた所にあり、商店街の中にある劇場でした。担当の大貫さん、長澤さん、そして松本課長の男子三人トリオが、企画もホール管理も劇場スタッフもやるという、いわゆる地域の典型的な劇場なのですが、このトリオが持っているエネルギーというか情熱のようなものは、他の何処にも無い唯一無二の力で、このトリオがいるからこそ、劇場と街とが良い関係でいるんだろうなと感じられ、やはり劇場は人で支えられる場所なのだと改めて感じる事が出来ました。

今回の実施では、一回目派遣が学校への演劇アウトリーチ。二回目派遣が地域へのアプローチと、ハッキリと分かれた物になりましたが、大きな目的は一つ、それは「次の世代を担う子供たちに文化芸術に触れて欲しい」というものでした。

劇場としては初めての学校への演劇アウトリーチでしたが、学校側の受け入れもとても好感が持てるもので、劇場の担当者と学校側とのコミュニケーションが上手くとれていたことが想像でき、劇場担当者の努力が感じられました。子供たちも素直な子ばかりで、ちょっぴりシャイなところもありはしましたが、沢山の笑顔に包まれて、良い時間が作れたと思います。

二回目派遣は盛り沢山の内容で、親子でまち歩きをして写真を撮って「ナゾ」を考える『まち歩きナゾさがし』、お芝居の小道具を作って遊ぶ『紙であそぶ桃太郎』、商店街のお店の方に取材をして、その方の生き様や人生を描き、空き店舗でリーディング公演をした『常陸多賀商店街劇場』などを実施しました。まち歩きや小道具作りをした二つの親子向け企画では、こちらの狙い通りに、普段は劇場に足を運ばないような方が訪れる機会を作ることが出来ました。特に小道具作りを楽しんだ『紙であそぶ桃太郎』では、2歳から参加可能としたことで、子供が小さくてなかなか劇場から遠ざかっていた方や、『劇場＝鑑賞する場所』というイメージを持っていた方に参加していただき、『親子で遊ぶ場所としての劇場』という選択肢を与えられたのではないかと思います。

『常陸多賀商店街劇場』の目的としては、「人と人とを演劇で繋げよう」ということだったので、観客と商店街の人、さらには地元の演劇人の方々にも出演の協力をいただいたことから、地元演劇人と商店街の人、地元演劇人と普段は地元の演劇を観ない人という繋がりも作ることが出来たので、とても良い広がりをみせた試みだったのではないかと思います。

劇場の役割が多くなった昨今、地域との繋がりを大切に何をしていくかが大事なことで、それは劇場の味方を増やすということにも繋がります。今回、まずは始まりの一歩を踏み出しました。これをなんとか続けていくことで、多賀町の人にとって、多賀市民会館が大切な存在になってもらえたらと遠く長崎から願っています。

## 茨城町（茨城県茨城町）実施データ

実施団体	茨城町
実施ホール	—
担当者	森 万純、久江安希
実施期間	下見派遣 令和5年5月16日(火)～5月17日(水) 1回目派遣 令和5年7月29日(土)～8月1日(火) 2回目派遣 令和6年1月15日(月)～1月18日(木)
アーティスト等	アーティスト:有門正太郎 アシスタント:門司智美、丸山文弥、志賀亮史(1回目派遣)、樋口ミユ(2回目派遣)、 越智良江(2回目派遣) アドバイザー:内藤裕敬(2回目派遣)
<p>■下見派遣内容</p> <p>5月16日(火) 現地下見(茨城町立中央公民館大ホールほか)、打合せ 5月17日(水) 関係団体打合せ、町内視察</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>7月30日(日) 9:00～12:00 まち歩きワークショップ「大ホール探検ツアー」 7月31日(月) 14:00～16:30 行政職員・教職員向けインリーチ</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>1月16日(火) 10:25～12:00 茨城町立青葉小学校アウトリーチ①(5年1組) 13:40～15:15 茨城町立大戸小学校アウトリーチ①(6年生) 1月17日(水) 8:30～10:05 茨城町立青葉小学校アウトリーチ②(5年3組) 10:25～12:00 茨城町立青葉小学校アウトリーチ③(5年2組) 14:00～16:45 行政職員向けワークショップ</p>	

## スケジュール

派遣	下見		1回目				2回目			
月日	5/16(火)	5/17(水)	7/29(土)	7/30(日)	7/31(月)	8/1(火)	1/15(月)	1/16(火)	1/17(水)	1/18(木)
9:00	移動		移動	まち歩きWS		フィードバック		移動	青葉小学校アウトリーチ②	
10:00	現地下見打合せ	関係団体打合せ			移動準備		移動準備	移動準備	会場準備	会場準備
11:00	移動	移動	移動		青葉小学校下見		青葉小学校アウトリーチ①	青葉小学校アウトリーチ③		移動
12:00	昼食	昼食		昼食	昼食	昼食	移動	移動 昼食	昼食	昼食
13:00	現地下見打合せ	打合せ	移動	打合せ	移動準備	フィードバック	移動	会場準備	移動	移動
14:00		町内視察		移動	行政職員 教職員 インリーチ			大戸小学校 アウトリーチ	会場準備	
15:00	移動	移動	打合せ			移動	打合せ 現地下見			
16:00	大戸小学校 下見・打合せ		移動	移動	青葉小学校 打合せ		移動	移動	移動	
17:00	移動				移動					
18:00					移動					
19:00										
20:00										
21:00										

## プログラム詳細

まち歩きワークショップ「大ホール探検ツアー」

7月30日（日）9:00～12:00

会場：茨城町立中央公民館 大ホール、茨城町総合福祉センターゆうゆう館

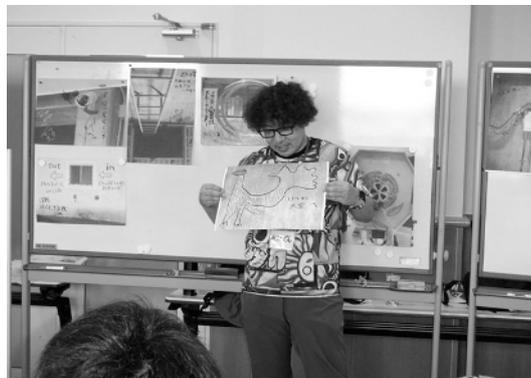
参加者：17名

茨城町立中央公民館大ホールは、約50年の役目を終え解体されます。様々なイベント・式典や活動の場となった大ホールを舞台に、新たな「想像力・発想力・インスピレーション」を体験する「まち歩きワークショップ」を開催しました。

参加者同士でコミュニケーションを取り合うゲームや、同じ写真を見て「猫」「自転車」「カセットテープ」など、見た人によって見え方が異なることなどを想像するワークを通して、それぞれの視点や発想の違いを感じることができました。

また、小学1年生から70代まで幅広い世代の参加者17人とともに、解体される大ホールを探検し、それぞれが気に入った場所を写真に撮り、印刷して文字やイラストを描き加え、何もない壁から鳥の絵が描かれたり、消火設備からお弁当ができたりと、参加者たちは思い思いに想像しながら作品を作りました。

参加者からは、解体される大ホールに対し、「発表会や町民祭でお世話になった場所」や「今までありがとう」と思い出の場所として振り返るとともに、大ホールの跡地に建設される新たな文化的施設には、「多くの人に利用してもらいたい」、「ぜひ使ってみたい」などの声が挙がりました。



行政職員・教職員向けインリーチ

7月31日（月）14:00～16:30

会場：茨城町駒場庁舎 会議室5-1

参加者：26名

学校で行うアウトリーチプログラムを実際に体験し、子どもたちへの効果や、アウトリーチ事業について理解を深めるためのワークショップを開催しました。

参加者が円になり、丸めたティッシュを如何に早く1周できるのか考えるワークでは、「輪を小さくしてみよう」、「何人かで塔を作り、転がす」などアイデアが出て、実際にタイムが短くなった時には歓喜の声が挙がるなど、盛り上がりました。

その後、事前に会場を撮影した写真を基に、想像を膨らませるワークを実施。同じネジの写真から、「猫が空を飛んでいる」や、「水泳の飛び込み台」といった違うものが想像され、参加者それぞれの個性を感じられるものとなりました。

最後に、有門さんからアウトリーチの必要性について説明があり、参加した教職員からは実際に体験したからこそ、「学校では教えられないこと、体験できないことを実践するものだ」と知ることができた。「授業にとりいれたい」との感想があり、アウトリーチ事業について理解していただける素晴らしい機会となりました。



## 青葉小学校アウトリーチ

1月16日(火) 10:25～12:00(5年1組)

1月17日(水) 8:30～10:25(5年3組)

1月17日(水) 10:25～12:00(5年2組)

会場：茨城町立青葉小学校

参加者：5年1組／32名、5年3組／32名、5年2組／31名

青葉小学校は町内で一番児童数が多く、今回は5年生3クラスに演劇の手法を用いたアウトリーチを実施しました。内容は「ういろう売り」「教室にある色や形、物を探す」「だまし絵」「写真を見て自分なりにタイトルや背景を考える」などのワークで、アーティストがクラスごとの特色をとらえながら、進めるスピードや順番、方法について調整しながら実施しました。

内容の詳細について、児童たちは事前に先生から聞いておらず「お楽しみに」とだけ伝えられていたため、突然目の前に現れたアーティストに「何するのかな？」と目を輝かせ、アーティストの一挙一動に興味を持ち、終始興奮している様子でした。

最初のアーティストによる口上「ういろう売り」は、一部聞き取れる現代言葉や表情、豊かな体現から、児童なりに内容を理解しようと、頭の中で話を繋げながら真剣に耳を傾けていました。また、室内にある色や物、形を探すワークで児童たちは、始めはなんとなく仲良しグループで合わせながら行動しているようにみえましたが、一人一人感じることや見方が違うことに気付くと一人で行動する児童が増え、それを自然と受け入れていたように思います。さらに、だまし絵や一枚の写真を見て「どんな風に見えたか」を一人ずつ発表していくと、お互いの発表内容に興味を持ち、個性を理解し、自分の物の見方が人と違うこと、正解はなく、違って当たり前ということをしっかり学んでいました。

実施後のアンケートでも「こんなに楽しい授業は初めて」「自分なりの物語を作りたい」「もっとやってみよう」など、児童たちの素直な想いが溢れていました。これから、心も体もさらに成長していく過程で、このアウトリーチを受け、「創造することの楽しさ」「自分なりの物の見方」「個性を認める」ことを知ることができたのは、児童たちにとってとてもよい経験となったように思います。



## 大戸小学校アウトリーチ

1月16日(火) 13:40～15:15

会場：茨城町立大戸小学校

参加者：30名

大戸小学校では6年生を対象に、前述の青葉小学校と同様の内容でアウトリーチを実施しました。

最初は、アーティストに対する警戒心のようなものが見える子もいましたが、それは興味の裏返しであり、あっという間に全員がそれぞれの興味の示し方で、ワークに最後までしっかり楽しんで参加していました。

また、アーティストからの「写真や物から、見えないものを見る力がみんなにはあり、それは、人の気持ちを想像する力に繋がる」という最後の言葉を聞く児童の表情は、笑顔であったり、真剣な眼差しであったり様々でしたが、どの児童の心にもしっかり届いたのではないかと思います。



## 行政職員向けワークショップ

1月17日（水）14:00～16:45

会場：茨城町役場本庁舎 大会議室

参加者：27名

庁内全課から年代も担当業務も全く異なる27名の職員に参加してもらい、新たな文化的施設の利活用検討と文化芸術の振興を図ることを目的としたワークショップを開催しました。

まず全員の顔が見渡せるよう、大きく円を描いて座り、アーティストからこのワークショップを開催するに至った経緯や目的を話しました。それから、同じ職場の職員ではありませんが、担当業務が違ふと普段関わることが少なく、お互いに顔しか知らない人も多かったため、改めて自己紹介を行ないました。その後、1人ずつ順番に自分の名前を言い、全員で大きな声で復唱したり早く復唱したり、いろんなパターンで復唱するというワークや、1枚のティッシュを全員の手に触れながら、いかに最初の人から最後の人まで早く渡せるかというワークを重ねることで、一気に和やかな空気となり、打ち解けることができました。

ここからグループに分かれ、新たな文化的施設建設に向けて、今まさに解体されていく中央公民館の最後の姿を見ながら、それぞれどんな思い出や期待があるのか話をしました。「子供の頃から、空手教室に通っていた」「成人式をここでした」などの思い出を聴くことで、中央公民館を利用したことがなかった人も思いを馳せ、解体工事の音に耳を澄ませながら、その時その場所でどんな会話があったかを想像して書き出しました。

ここでアーティストたちからサプライズがありました。なんと、それぞれが会話や音を書き出した紙を集め、音楽に合わせて即興で声に出し、演じてくれたのです。それはまさにその瞬間、最後の壁が崩れる時であり、想いが溢れ涙を流す職員もいました。

最後に、また円になって座り、ワークショップの感想や改めて新たな文化的施設に関する想いを一人一人話して、終了となりました。最初の自己紹介の時は「なぜ担当が違う私たちが？」という空気が少なからずありましたが、最後に感想を述べる時は、その空気は一変し、全員がきちんとこのワークショップに参加する意義を感じ取ってくれたことがしっかりと伝わってきました。実施後のアンケートでも「全職員がこのワークショップを受けるべき」など、参加した職員の前向きな思いが書かれていました。



## 担当者の報告・評価

### ●この事業への参加動機

茨城町では、令和8年度に新たな文化的施設が開館します。東日本大震災により、茨城町立中央公民館は大ホール（体育館）以外が利用できなくなり、団体の活動の場や文化芸術に関連する発表の場、触れる機会が限られていました。

また、活動する団体が高齢化とともに減少していく中、公民館事業として、子どもから高齢者まで町民の方々が参加できる講座等を開催してきましたが、参加者数も少ないのが現状です。

公民館ではなく、新たな施設となる文化的施設の開館に向け、文化芸術に関連する事業の実施方法や、町民の方々が文化芸術活動に関心を持ち、実際に参加していただけるようにするにはどうしたらよいか、また、当町では、学校へのアウトリーチ事業を実施しておらず、アウトリーチ事業とはどういうものなのかといった様々なことを学びたいと考え、この事業への参加を決めました。

### ●企画・実施において苦労した点

新たな施設がまだ建設されておらず、ホールがない中で、かつ、今後建設される新たな文化的施設につなげるワークショップは、どういったことができるのかといった点に悩みました。

有門さんの「今ある公民館を解体して、新しい施設ができるなんて、ドラマがある」との言葉に、後ろ向きな考えから、解体される大ホールに主軸を充てることで前向きにとらえることができました。

また、今まで実施していなかった「学校でのアウトリーチ事業」について、担当者も学校側も初めてのことで、事業の段取りや調整に苦労しました。実施校が決まった後も、担当として、実際に参加してから理解した部分も多く、説明不足の点が多かったのではないかと感じました。

新たな施設の建設が予定され、事業展開を行う中で、どのように事業を組み立てていくのか、単年度の事業でどこまでやれるのか、どうするのが一番効果的なのか、考えれば考えるほど答えが出ない迷路に入り込んだみたいでした。

### ●プログラムを実施した成果

まち歩きワークショップでは、最初に解体される大ホールとそこに新設される施設に関する動画を上映し、それぞれの施設に対する思いを馳せ、ワークを通して参加者それぞれの想像力や個性の違いを感じながら、文化・芸術に触れる機会を生み出すことができました。また、異年齢の参加者がいたことで、子どもと大人の発想の違いにも驚かされるが多かったです。今後、施設が建設されますが、施設に焦点をおいてワークショップを開催する方法は、新しい施設を知っていただくうえで、とても効果的だと感じました。

教職員向けのインリーチを開催したことで、学校アウトリーチ事業の意義や効果を理解していただくことができたとともに、実際の学校でのアウトリーチ事業を通して、子どもたちにあった効果を教職員の先生方に体感していただけたことは、今後の事業展開につなげることができると感じました。

誰に参加してもらえばよいか悩んだワークショップでは、行政職員向けに開催することで、新たな文化的施設に関して理解を深めてもらえるよい機会にすることができました。

### ●今後の展望

今回の事業を通して、想像力や個性の違いを目の当たりにしました。単に、「演劇の手法を使った」と言っても捉え方、方法は幅広く、「こんなこともできるのか」といった感動を覚えました。

今後、新たな文化的施設が開館する当町にとって、何よりも大切なのは“継続”です。初めて実施した施設に焦点を当てたワークショップや学校でのアウトリーチ事業を今後も継続していき、文化芸術のすそ野の拡大に努めていきたいです。

また、今回実現できなかった、実際に文化芸術活動を行っている団体に焦点をあてたワークショップの開催や、新たな文化的施設に関わる人たちがどんどん増える「人と人との出会いの場」となれるような企画を立案し、実施していくことで、様々な町民の方に参画してもらえるような施設を目指していきます。

### 新しく出来る文化施設を自分たちの遊び場に

有門正太郎

茨城町は茨城県中部に位置し、水戸駅から車で30分ほどで町に入る。人口3万人、従来から盛んだった農業に加え、近年は工業の成長が著しい。

震災の影響で茨城町役場に隣接していた中央公民館が被災し、一部の施設を残して運営してきたが、この度新たな文化的施設を建てるにあたり、リージョナルシアター事業を活用したいといった狙いからスタートしました。

アウトリーチ事業も演劇ワークショップも未経験な土壌で、隣町には水戸芸術館などの施設もある環境の中どのような演劇的アプローチが適正か担当者はじめ役場の方々と話し合いを重ねていきました。

具体的に担当者や職員の方に演劇ワークショップを体験してもらい事に力を注ぎました。担当者や関わる職員が効果や可能性を感じる「実感」を持つこと、その実感を共有する事こそ何よりも大切で近道のように感じています。

アウトリーチに関しては、生涯学習課の強みも活かし、協力してもらえる小学校の選定や打ち合わせなど担当者の丁寧な心配りの甲斐があって初めてにしてはスムーズだった印象です。もちろんまだよく分からない状態での学校の選定、アウトリーチの効果などを説明する事に苦勞している様は大変そうでした。しかし継続する事で報われていく時間にも感じました。コーディネートする役割と、アウトリーチの効果や必要性をいかに教育現場の先生方に理解してもらえるかがこれからの課題と感じています。小中学校の担任の仕事量は多く、学習指導要領の更新やコロナなど様々な変化の中でアウトリーチの時間を割く事を理解してもらう事が以前よりも難しいと感じています。

今回様々なアプローチで茨城町のプログラムを実施しました。

印象深かったのは重機で解体されている公民館を見ながら、当時の催しを想像する職員向けワークショップです。新たに出来る施設に対して少しかもしれないが、「他人事」から「自分事」に変化したように感じました。

当初より「継続を目指しています」という言葉をよく聞きました。しかしながら実際に継続できるか否かは町の情勢で大きく左右します。今回を経て「これが継続するとどんな町になるんだろう?」「新しい文化施設でこんな企画があれば面白そう」など担当者や住民から様々な意見や交流が生まれるきっかけにこのリージョナルシアター事業がなってくれたら、こんなに嬉しいことはないのです。

私にとってまた一つ特別な町が増えました。遠くからしっかりと経過観察したいと思います。

## 狛江市立西河原公民館（東京都狛江市） 実施データ

実施団体	狛江市教育委員会教育部公民館
実施ホール	狛江市立西河原公民館
担当者	瀧川直樹、高橋公平、小島 希
実施期間	下見派遣 令和5年5月22日(月)～5月23日(火) 1回目派遣 令和5年8月18日(金)～8月21日(月) 2回目派遣 令和5年10月20日(金)～10月23日(月)
アーティスト等	アーティスト:田上 豊 アシスタント:田中美希恵、江花明里(1回目派遣)、志賀亮史、晒名未悠(2回目派遣) アドバイザー:岩崎正裕(2回目派遣)
<p>■下見派遣内容</p> <p>5月22日(月) 下見(西河原公民館、西河原公園)、打合せ 5月23日(火) 下見(中央公民館、西河原公民館)、打合せ</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>8月19日(土) 9:30～12:30 西河原劇場「ホールであそぼう」①「演劇にふれよう」(小学4年生～6年生) 14:00～17:00 西河原劇場「ホールであそぼう」②「演劇をつくろう」(中学生・高校生) 8月20日(日) 14:00～17:00 西河原劇場「ホールであそぼう」③「演劇をあびよう」(一般(18歳以上))</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>10月21日(土) 14:00～16:00 西河原劇場「ホールであそぼう」④「演出家と出会おう」(一般(中学生以上)) 10月22日(日) 13:00～16:00 西河原劇場「ホールであそぼう」⑤「西河原アドベンチャー」(小学生と保護者)</p>	

## スケジュール

派遣	下見		1回目				2回目				
月日	5/22(月)	5/23(火)	8/18(金)	8/19(土)	8/20(日)	8/21(月)	10/20(金)	10/21(土)	10/22(日)	10/23(月)	
9:00	移動	中央公民館 下見・打合せ	移動	送迎・受付	送迎	移動	移動	送迎	送迎	移動	
10:00				西河原劇場 ①「演劇にふれよう」	前日振返り 2回目派遣 打合せ			準備	準備		
11:00				休憩	休憩			休憩	休憩		
12:00	送迎	休憩 移動	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩	受付	受付		
13:00	西河原公民館 西河原公園 下見	打合せ	送迎	受付	受付	移動	移動	受付	西河原劇場 ⑤「西河原アド ベンチャー」	移動	
14:00			全体打合せ テクニカル 打合せ	西河原劇場 ②「演劇をつく ろう」	西河原劇場 ③「演劇をあび よう」		西河原劇場 ④ 「演出家と出 会おう」	撤収 準備	撤収		
15:00	打合せ	送迎	撤収	移動	移動	移動	送迎	撤収 準備	フィード バック	移動	
16:00			撤収	移動	移動						移動
17:00	移動	移動	撤収	移動	移動	移動	送迎	撤収 準備	フィード バック	移動	
18:00			送迎	移動	移動						移動
19:00			移動	移動	移動						移動
20:00	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	
21:00	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	

## プログラム詳細

西河原劇場「ホールであそぼう」

- ① 8月19日(土) 9:30～12:30「演劇にふれよう」(小学生4～6年生)
- ② 8月19日(土) 14:00～17:00「演劇をつくろう」(中学生・高校生)
- ③ 8月20日(日) 14:00～17:00「演劇をあびよう」(一般(18歳以上))

会場：西河原公民館 多目的ホール

参加者：① 20名、② 5名、③ 15名

リージョナルシアター事業を活用した主な目的は、

- ① 多くの方に、西河原公民館の存在及び魅力を知ってもらう。
  - ② 子どもや親子等、若い世代を呼び込み、西河原公民館に活気をもたらす。
- 上記の2点である。これらの実現に向けて、最終的には対象者を3つの区分に分け、演劇を通じたワークショップを実施した(プログラム自体は同一の内容)。

### 【～音であそぼう～】

- ① 「ホールを身近に感じよう」

ホール内を周回し、色探しゲームや、壁や天井のどこから波の音が聞こえるかを体感する遊びを行った。

- ② 「音を使ったジェスチャーゲーム」

「学校のチャイム」や「踏切のサイレン」といった音を聞いてから、それらをグループでイメージを共有し、ジェスチャーで表現した。

- ③ 「これって何の音？」

ホールの観覧席が出てくる音源を流し、各自がそのイメージを白紙に描き、それぞれのイメージを聞いた。最後に何の音か発表があった。

### 【～演劇であそぼう～】

- ④ 「常識に惑わされるな」

指が増えるうた「まほうのゆび」やクイズ「3つの電球」等のゲームから、常識に囚われずに、物事を考える大切さを説明した。

- ⑤ 「イス取りゲーム」

舞台上にイスを人数分設置し、全員が協力して鬼を椅子に座らせない「イス取りゲーム」を行った。チームにおける話し合いや協力することの大切さを説明した。

- ⑥ 「台詞を考えて、演じてみよう」

台詞が穴開きになっている台本を使い、各グループで好きにシチュエーションや台詞を考えて練習を行った。その脚本は他のグループのものと交換し、最後に本格的な音響と照明を活用しながら発表した。

最初は緊張していた参加者も、プログラムが進行するにつれて、徐々に表情が柔らかくなっていった。

小学生の部は、終始賑やかな空間で、子どもたちの元気で活動的な様子を見ることができた。

中学生・高校生の部では、人数が少ないことが少し危惧されたが、その分密な時間を提供でき、参加者が真剣に演出家の助言に耳を傾けていた姿が印象的であった。

18歳以上の一般の部では、演劇に興味のある参加者が揃っており、どのグループも和気あいあいと楽しく取り組んでおり、最後には本格的で質の高い演劇を発表いただいた。

また、志賀さんと田上さんの工夫により、ホールの観覧席が「ある」状態と「ない」状態を上手くプログラム上使い分けていただいたため、参加者により深く当館ホールの魅力を感じていただくことができた。発表後は、拍手でグループ同士の健闘を称え、仲良くなっていった参加者も見受けられたので、公民館の本来の役割である「つどろ、まなぶ、むすぶ」を短い時間でありながらも実現できたように感じる。参加者からのアンケート回答結果では、「楽しかった」、「照明を点けたら、凄い演劇になった」、「徐々に周りの方と仲良くなれるようなプログラムで良かった」、「演劇関係をまた期待しています！」等様々な感想をいただくことができた。



西河原劇場「ホールであそぼう」～演出家と出会う～  
10月21日（土）14:00～16:00（一般（中学生以上））  
会場：西河原公民館 多目的ホール、リハーサル室  
参加者：11名

参加者を2つのグループに分けて、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」及び「真夏の夜の夢」の1シーンを田上チーム、志賀チームに分かれて練習し、最後に本格的な音響と照明を使って発表した。台本の読み合わせの段階から、演出家の助言の下、演技や演出に工夫が加わり、さらに音響、照明が追加されることで、演劇そのものが進化していく様子を肌で感じる事ができた。約2時間という限られた時間ではあったが、多くの演劇に興味のある方にご参加いただき、本格的な発表内容に仕上がった。

参加者からのアンケート回答結果では、「あつという間だったので、もっとやりたかった」や「ストレス解消になった」、「また同じような演劇の講座に参加したい」といった様々な意見をいただくことができた。



西河原劇場「ホールであそぼう」～西河原アドベンチャー～  
10月22日（日）13:00～16:00（小学生とその保護者）

会場：西河原公民館 暗室（B1F）、ロビー（1F）、学習室Ⅲ・茶室（2F）、多目的ホール・リハーサル室（3F）、視聴覚室（4F）  
参加者：9組（18名）

「変な浦島太郎」をテーマに、対象者を2つのグループに分けて、演劇に必要な配役や台本、小道具、演出等を西河原公民館の各部屋を巡りながら決定して最後は多目的ホールで発表した。各部屋には、参加者を誘導する個性的なキャラクターを設けて、参加者が楽しめるような演出を施した。

このように西河原公民館の全てのフロアを活用した講座は非常に珍しく、ホールだけではなく、暗室や茶室といった特殊な部屋を知ってもらう良い機会となった。また、参加者だけではなく職員としても大変貴重な経験とすることができた。

参加者からのアンケート回答結果では、「子どもたちの性格まで配慮して、無理せず楽しく参加できるようにしていただいた」、「最初は遠慮がらだった子どもが、最後には楽しく舞台に立っていた」、「色々な部屋を回って施設を知ることができて面白かった」、「物語や音楽を自分たちで考えられたから良かった」といった感想をいただくことができた。



## 担当者の報告・評価

### ●この事業への参加動機

狛江市立西河原公民館は、本格的な照明や音響機能を伴う多目的ホールや、暗室、茶室といった魅力的で個性的な施設を擁している。しかしながら、最寄り駅である小田急線狛江駅から離れていることや、館外の周辺に商業施設が少ない等の理由で、施設利用率が低いことが課題として挙げられている。また、利用者の年齢層も高齢化が進んでおり、今後の公民館活動に関わる担い手不足等も課題の一つである。リージョナル事業を活用することで、演劇を通じて西河原公民館の魅力の発信や、子ども・子育て世代といった若者を取り込むきっかけとなると考え、参加申込することとなった。

### ●企画・実施において苦労した点

参加者の募集は非常に苦労した。初回の8月の実施の際は、どの程度の反応や申込があるか全く見当が付きなかつたこともあり、出来る限り周知に力を入れることとした。周知方法としては、①広報こまめ（市刊行物）への掲載②市内掲示板へのポスター掲示③小田急線駅内ラックへのチラシ配架④各市内公共施設へのチラシ配架・ポスター掲示⑤市内の各小中学校、狛江高校へのチラシ配付⑥「調布市グリーンホール」や「調布市文化会館たづくり」等その他施設への配架⑦市公式SNS（フェイスブック・エックス）への掲載などを行った。これまでの公民館事業においてここまで周知に力を入れたことはなかつたが、それでも反応が乏しく、定員に満たなかつた。「演劇」という言葉のハードルが一般の方にとっては高かつたことや、新型コロナウイルス感染症が少し落ち着いてきたこともあり、夏季期間中の旅行等の外出が増えたこと等が原因として考えられる。

また、事業について都道府県の教育委員会にあまり事業内容等の情報が伝わっていないこともあり、市内都立高校へのチラシ配布等の調整は特に苦労した。事業自体の周知が進めば地域での連携がよりスムーズになると考えられる。

加えて、予算の確保も苦労した点として挙げられる。周知の際に必要なチラシの印刷製本費を他予算から流用して対応することとなつたり、派遣アーティストやアシスタントの現地交通費や荷物の通信運搬費等といった予算をなかなか捻出できず断念したりすることもあつた。市予算は、前年度の10月までにはおおよそ確定しているため、こういった必要経費の適正な見込みが難かつたことが原因として挙げられる。

### ●プログラムを実施した成果

定員に達したプログラムはなかつたものの、8月、10月それぞれの実施に向けて、ホールの写真を載せたチラシを市内の多くの公共施設や小中学校・高校に配付することができたため、それだけでも西河原公民館を認知していただく良いきっかけになったと感じている。

また、参加者のアンケート結果では、「面白かつた」、「貴重な体験ができた」、「ホールのことを知らなかつたので、もっと利用したい」等の様々な感想をいただくことができた。参加者の中には、後日窓口に来て、「公民館を演劇の練習で利用するために、団体登録をしたい」という方もいらつした。このことから、これまで西河原公民館を知らなかつた方に多く参加いただき、少しでも西河原公民館の魅力の発信や、担い手の確保に役立てることができたと思う。

併せて、職員のノウハウの向上にもつながつた。本番までの演出家との打ち合わせの手順や、下見の受け入れ、送迎の方法・宿泊施設の確認といった基本的な事項ではあるものの、改めてそれらの重要性について学んだ。また、各ワークショップを通じて、参加者との距離の縮め方やプログラムの組み方、観覧席の安全性の確保、音響操作卓の操作方法等、様々な部分で学ぶことが多かつたと感じている。

### ●今後の展望

今回の西河原劇場「ホールであそぼう」を一過性のものにせず、これをきっかけに、いかに西河原公民館の魅力の発信や若者世代の担い手の発掘をしていくかが重要である。前述したような、「参加者が自分たちで演劇の団体を立ち上げて、西河原公民館を利用したい」といった事例があつたときに、本事業を実施した本当の効果が見えてくるのではないかと考える。

また、今回実施するまでの過程において、職員同士でいろいろとアイデアを出し合つた。例えば、地域資源である西河原公園を活用した事業や、近辺に位置する和泉小学校との連携事業など、当館の魅力の発信や若者世代を呼び込むための手法は、まだまだたくさんあることに気付かされた。今回の西河原劇場に継続性を持たせ、それが少しでも西河原公民館の発展に寄与できるよう取り組んでいきたい。

# アーティストレポート

灯台下暗し、だからこそリージョナルシアター事業がある。

田上 豊

狛江市において、現在、市民の文化活動の場として大きく機能しているのが西河原公民館（本館）と中央公民館（分館）である。ただし、狛江駅近の本庁舎に隣接する中央公民館は2024年に改修工事に入るため、本館である西河原公民館（駅から徒歩15分の場所のためやや存在感に欠けるらしい）に利用者が流れ込むことが予想されている。このような状況を鑑み、これ幸いと市民に対して事前に本館の存在をアピールすべく本事業へ申請してきたのが西河原公民館である。

西河原公民館に向いて一番驚いたのは、施設内の設備の充実度だった。複数の学習室に加え、和室、視聴覚室、生活工芸室、陶芸窯、料理実習室、暗室、茶室、パソコン室、リハーサル室、幼児室、団体活動室、展示ギャラリー、そして図書室まである。何よりも心が踊ったのは、202名を収容できる電動客席を有した多目的ホールの存在。このホールにはLEDの照明機材が完備され、音響のスピーカーに至っては目を疑うほどの数が設置されていた。

さて、狛江市民への西河原公民館のアピールという使命を受け、実施したプログラムは以下の通りである。

## 【1回目派遣・8月実施】

- ① 小学生向け演劇ワークショップ〈演劇にふれよう〉
- ② 中学・高校生向け演劇ワークショップ〈演劇をつくろう〉
- ③ 一般向け（18歳以上）演劇ワークショップ〈演劇を遊びよう〉

## 【2回目派遣・10月実施】

- ④ 演出家による一般向け創作ワークショップ〈演出家と出会おう〉
- ⑤ 小学生とその保護者向け全館回遊創作ワークショップ〈西河原アドベンチャー〉

まずは①～③の1回目派遣のプログラムについて。対象年齢を分け、全ての枠で演劇入門となるワークショップを実施した。入門編とはいえプログラムの内容には変化をつけ、音を軸としたもの、テキストを軸としたものなど対象者へのアプローチを変えた。また、1回目派遣のプログラムは、狛江市で演劇ワークショップを行った場合のニーズ調査も兼ねられていた。②の中高生の部の参加率は少し低かったものの、その他のプログラムでは概ね定員通りの参加数となった。地域住民に対して「演劇」という枠でのワークショップの敷居の高さを危惧していた西河原公民館。今回の結果は、ホール側にとって今後実施する上での良き判断材料になったと思われる。また、一般向けの枠では狛江市在住のアーティストも来館し、人材発掘の観点からも実りある実施となった。

次に、1回目派遣の実施経験を以てより負荷の高い内容に挑んだ2回目派遣のプログラム。特筆すべきは、全館を使用した回遊型の創作プログラムである。このプログラムは、複数人のワークショップ参加者が一つのチーム（全体では2チーム）となって施設内の様々な部屋を巡り、各部屋で待ち受けるダンジョンをクリアしていく回遊形式をとった。これを強引にアドベンチャーと呼びつつも各部屋で行われるのはセリフや登場人物の考案、配役決め、小道具の選択、照明や音響の挿入箇所の選択など、演劇創作のプロセスに沿ったものばかりである。終盤のリハーサル室で行われる「稽古体験（最終試練）」を乗り越えると、ゴール地となる多目的ホールの舞台上にたどり着く頃には小作品の本番を行える仕様を目指した。部屋以外の箇所では、電気が落とされた地下階の廊下を懐中電灯で進ませたり、物音を立てると睨みを利かせてくるお年寄り（実際にいつもいる）が鎮座するエントランスを横断させたりするなど、西河原公民館ならではの演出も盛り込んで非常に楽しい取り組みとなった。

と、ここまでサクッと記してみたが、このプログラムの裏側で非常に多くの方にご協力いただいたことを追記しておかなくてはならない。新旧の地域創造のスタッフ、リージョナルシアター事業のアドバイザー、次世代の派遣アーティスト、西河原公民館の館長を含む全ての事業スタッフ、この全ての方々がアテンド係かどこかの部屋での「待ち受け人」を担ってくれた。振り返る度に周りを巻き込んで無茶を強いてしまったと反省する一方で、あの時の「忘れていた大人の文化祭」のような時間をまた味わいたいと切望してしまう。地域創造職員もホール職員もアーティストも横一列になって「さて、どうやって乗り切ってやろうか」と奮闘することの楽しさたるや。狛江市に西河原公民館あり。あの場所で創出したプログラムが、劇場の記憶として参加した狛江市民に刻まれていることを願って。



## ロームシアター京都（京都府京都市）実施データ

実施団体	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団
実施ホール	ロームシアター京都
担当者	栢谷雄一郎、山形ゆき、垣田みずき
実施期間	下見派遣 令和5年6月29日（木）～6月30日（金） 1回目派遣 令和5年8月5日（土）～8月8日（火） 2回目派遣 令和6年1月7日（日）～1月10日（水）
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介 アシスタント：佐山和泉、大川潤子、樋口ミユ（1回目）、越智良江（2回目）
<p>■下見派遣内容</p> <p>6月29日（木）岡崎学区社会福祉協議会 市営住宅の集会場にて打ち合わせ 【リージョナル事業枠外 WS】17:30～21:30 ファシリテーター養成～レクチャー&amp;ワークショップ①</p> <p>6月30日（金）左京老人福祉センターにて打ち合わせ、クリエイティブハウスともつく（F 邸）にて打ち合わせ</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>8月6日（日）10:00～14:00 高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（ともつくカフェ①） 8月7日（月）9:30～11:30 高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（左京老人福祉センター①） 14:00～16:00 ファシリテーター養成～レクチャー&amp;ワークショップ②</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>1月8日（月）10:00～14:00 高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（ともつくカフェ②） 1月9日（火）9:30～11:30 高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（左京老人福祉センター②） 13:30～15:30 高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（岡崎学区社会福祉協議会「いどばたサロン」）</p>	

## スケジュール

派遣	下見		1回目				2回目			
月日	6/29（木）	6/30（金）	8/5（土）	8/6（日）	8/7（月）	8/8（火）	1/7（日）	1/8（月）	1/9（火）	1/10（水）
9:00	移動			移動	移動			移動	移動	
10:00		集合移動			左京老人福祉センター WS ①			ともつくカフェ WS ②	左京老人福祉センター WS ②	
11:00	集合移動	左京福祉センター 打合せ		ともつくカフェ WS ①						
12:00	岡崎学区社協 打合せ	移動		※12:00～13:00 ランチ	移動	移動		※12:00～13:00 ランチ	移動	移動
13:00	移動	ともつくカフェ 打合せ								
14:00	打合せ	移動		移動	ファシリテーター養成～レクチャー&ワークショップ②			移動	岡崎学区社会福祉協議会「いどばたサロン」WS	
15:00										
16:00		打合せ		翌日に向けての打合せ				翌日に向けての打合せ	フィードバック	
17:00		移動	移動				移動			
18:00	【枠外 WS】									
19:00	ファシリテーター養成～レクチャー&ワークショップ①		打合せ				打合せ			
20:00										
21:00										

## プログラム詳細

高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（ともつくカフェ①②）

① 8月6日（日）10:00～14:00（うち1時間は昼食休憩）

② 1月8日（月）10:00～14:00（うち1時間は昼食休憩）

会場：クリエイティブハウスともつく（F 邸）

参加者：① 11名、② 10名

毎月第一 / 第三日曜日に高齢者の女性が10名～15名集まる“ともつくカフェ”という集まりにお邪魔してワークショップを行った。場所は嵐山にある一軒家で、家の持ち主に管理を任される形でNPO法人地域共生開発機構ともつくの代表の方がこの集まりを取りまとめている。

事前の見学の際は、水墨画教室が開催され、すぐとなりでギターを弾いている人がいた。毎回、様々な催しが実施されているが、内容については明確な実施スケジュールがあるわけではなく、居場所づくりやゆったりとした時間を過ごすことを目的とした集まりである。お昼時には台所でどなたかが作ったワンコインランチがふるまわれた。参加者は自由に入出入りして、朝から昼過ぎまでの時間を過ごしていた。好奇心旺盛な高齢者の集まりという印象だった。

ワークショップ当日、事前に説明をしていたものの、明確なイメージをもった参加者はいっしょらず、「よく分からないけれど、“ともつくカフェ”の集まりを楽しみに来ました」という方ばかりだった。

そんな中始まったワークショップでは、アイスブレイクの後出しジャンケンやナンバーバルでのグループ作りなどのシアターゲームで参加者は多いに盛り上がった。また「京都の癒やされるスポット」を演劇風に発表した時も笑いが絶えなかった。お昼ご飯の後は、「二十歳の自分」に言いたいことを紙に書いて参加者それぞれが発表した。この時は、自分の人生を振り返り思いを馳せるような時間となった。

月二回の集まりで、お互いに顔を見知っている方々たちも多いが「今回のワークショップを通じて、いつもと違った一面を見る・見せることになり、面白かった」と後日、参加者から感想をもらった。

演劇の手法を用いて、深いコミュニケーションを体験してもらうことができた。

それから、5か月後の1月に2度目の訪問。前回好評だったこともあり半数は同じ方が参加してくれた。噂を聞きつけて初めて参加してくださった方もいた。

前回の参加者から「プロの俳優の演技が見てみたい」というリクエストがあった。午前中は前回同様にシアターゲームでコミュニケーションをとり、午後は多田さんがいろいろな演出手法を披露しながら、「走れメロス」を上演した。

2回目の訪問とあって、ファシリテーターとアシスタントの皆さんが“ともつくカフェ”に流れる時間に自然に寄り添うようにワークショップを実施していた。演劇の手法を用いながら、緩やかに豊かな時間が流れており、参加者の皆さんとそれを共有することができた。



## 高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（左京老人福祉センター①②）

① 8月7日（月） 9:30～11:30

② 1月9日（火） 9:30～11:30

会場：左京老人福祉センター

参加者：① 15名、② 12名

京都市左京老人福祉センターは、地域の高齢者のみなさんが健康で明るい生活を送れるように、様々な行事を通して生きがいづくり・仲間づくり・健康づくりを推進する施設である。カラオケ、陶芸、体操など様々なプログラムが実施されている。今回は2時間の枠をもらい「俳優体験をしませんか？」と募集をかけ、15名が集まってくれた。卓球台が3台ならべられる広い会場で実施できた。“ともつくカフェ”の会場は一軒家だったので、部屋をまたぐ段差や空調の問題があったが、この施設は、ワークショップを実施するのに適した環境だった。

“ともつくカフェ”同様に様々なシアターゲームが行われた。ひとつを例に内容を紹介する。

【内容】9人ずつ2グループに分かれる。グループ内で1～9の番号を決める。グループが二つあるので、自分と同じ番号の人が会場内にもう一人いることになる。その同じ番号の人を探すというゲーム。

（探し方）自分の番号を基準に自分の架空の趣味をそれぞれが考える。数字が大きい人ほど活発な趣味、数字が小さい人ほどおとなしい趣味を考える。1番の人は「世界一高い山から順番に登頂する」、9番の人は「霧吹きに水をいれてシュッと噴射して時間を過ごしています」という具合。自分の所属しないチームの人とコミュニケーションをとりながら、自分と同じ番号の人を探す。9組中7組が正解して歓声がわいた。

“ともつくカフェ”は顔を知っている方が集まっていたが、ここはプログラムに興味を持って集まってくれた方々なので、参加者同士の面識はない。それでも、時間が経過するにつれて、笑い声が大きくなっていった。最後はグループに分かれて「京都の癒やしのスポット」を、演劇的に発表した。演劇未経験の参加者がほとんどだったが、このワークショップを通じて演劇の一端に触れてもらうことができた。

2度目の訪問では、8月の参加者から、セリフを読みたいというリクエストがあった。“ともつくカフェ”同様、演劇はまず台本があって、セリフを言葉に出すというイメージが強いことが分かる。

8月同様にシアターゲームを実施した後は、「走れメロス」の台本を渡して、グループにわかれ、グループごとに演出を考えてオリジナルの「走れメロス」発表するというワークを実施した。

この施設で実施されているプログラムの中で、他に似たようなワークショップはないので、注目度も高く、内容も好評だった。



高齢者向け演劇の手法を使ったワークショップ（岡崎学区社会福祉協議会「いどばたサロン」）

1月9日（火）13:30～15:50

会場：岡崎学区社協「いどばたサロン」（岡崎集会所）

参加者：15名

年三回の社会福祉協議会の集まりで地元の高齢者が集まる「いどばたサロン」でワークショップを行う事が出来た。普段は、特殊詐欺や押し買いの注意喚起などが行われたり、お茶会が行われたりする集まりである。会場である集会所は、左京老人福祉センターに比べて狭い会場だったが、広さに合わせたワークショップを実施していただけた。“ともつくカフェ”、左京老人福祉センターと同様にシアターゲームでは笑い声が絶えなかった。演劇の創作活動に参加者が集中していく過程を見ることができた。20歳の自分に贈る神様からのメッセージを創作して読み上げるワークでは、その人の人生が伝わり、心熱くなる場面もあった。社会福祉協議会の事務局長からも、他の社会福祉協議会の集会でも実施できそうだと感想をもらうことができた。



【リージョナルシアター事業枠外】

ファシリテーター養成～レクチャー＆ワークショップ①

6月29日（木）17:30～21:30

会場：ロームシアター京都 ノースホール

参加者：11名

多田さんが下見に京都にいらしたタイミングで、リージョナルシアター事業の枠外で「ファシリテーター養成～レクチャー＆ワークショップ①」を実施した。ロームシアター京都では、2023年度のリージョナルシアター事業の経験を経て、2024年度以降も継続して、アウトリーチで演劇の手法を用いたワークショップ実施したいと考えている。地元の演出家やファシリテーター志望の方がご自身のスキルアップをしたり、参加者それぞれの実践スキルを共有したりする場になることを望んで実施した。参加者のモチベーションも高く、よい情報交換の場となった。ただし1度きりの4時間の実施だったので、養成の場として機能するには繰り返しの実施が必要だと感じた。

ファシリテーター養成～レクチャー＆ワークショップ②

8月7日（月）14:00～16:00

会場：ロームシアター京都 会議室

参加者：4名

6月にリージョナルシアター事業の枠外で実施された「ファシリテーター養成～レクチャー＆ワークショップ①」の参加者に、8月6日、7日のワークショップの見学を呼び掛けた。8月6日の“ともつくカフェ”は1名が見学され、8月7日の左京老人福祉センターは3名が見学された。左京老人福祉センターでのワークショップの後に14時から「ファシリテーター養成～レクチャー＆ワークショップ②」を実施した。参加者は4名。座談会形式での意見交換会となった。参加者の中でも、ファシリテーターとしての経験値にばらつきがあり、良い情報交換の場となった。



## 担当者の報告・評価

---

### ●この事業への参加動機

ロームシアター京都では、若年層向けの育成事業や、中高年層が多く参加する公演や講座は実施していますが、高齢者に向けたアプローチや交流機会を創出できていません。リージョナルシアター事業でアウトリーチを実施し、劇場と高齢者層との新たな関係を生み出すことができればと考えました。

### ●企画・実施において苦勞した点

劇場として、高齢者に向けたアプローチをしようと考えた当初、私の頭に「高齢者」というワードは浮かんでいないものの、その言葉についての具体的なイメージがありませんでした。高齢者と言っても、どのような健康状態の方たちと関係を築くのか、また、その方たちはどこにいらっしゃる方々かということの具体的なイメージがありませんでした。そこで、高齢者施設に相談に行き、紹介いただき、様々な施設や集まりを訪ねました。その中から、このワークショップの受け入れ先として適している場所を見つけ、受け入れ交渉をしました。「演劇の手法を使ったワークショップ」をさせてほしいというリクエストを理解していただくことはなかなか難しかったのですが、言葉を尽くして説明しました。最終的に3カ所の受け入れ先を見つけることが出来ましたが、この受け入れ先を見つけることと受け入れ交渉を結実させることが、実施において一番苦勞した点です。

### ●プログラムを実施した成果

受け入れ先が決まってからは、おおむねスムーズに物事を進めることが出来ました。好奇心の強い方々が集まってくれたこともあり、どの会場でもワークショップは盛り上がりました。参加いただいた方々からも、また、受け入れて下さった施設や集まりの責任者の方からも好評をいただくことになりました。劇場が主催するワークショップによって、劇場と高齢者の間で交流が生まれ、また演劇の手法を使うことによって、参加者の方々の演劇への認知が広がりました。さらに、ワークショップ参加者が、これまでになかったコミュニケーションを体験することで、普段見せることが無かった一面を見せてくれたことから、“演劇の手法を使ったワークショップ”が、普段の交流とは違う刺激を参加者たちに与えていることを実感してもらえました。劇場が主催するワークショップにおいて、演劇が参加者に有機的に機能することを実感してもらえたことは、劇場と市民とのつながりを考えるときにたいへん有意義な成果と言えます。

### ●今後の展望

高齢者向けのワークショップを継続して実施していきたいと考えています。今後の展望を模索するうえで、今回のワークショップと同内容のことを続けていくことが劇場の事業として有効かどうかについて考えました。また、今年度始まったワークショップを続けるのではなく、次年度、そして次々年度はさらに発展させていかなければならないのではないかと考えました。しかし、まだ1年しか実施しておらず、別の展開に無理に持っていくことを選ばずとも、まずは継続していくことで、高齢者の皆さんと交流しながら次の展開を模索しようと考えています。次年度は地元の演出家にワークショップを依頼します。ロームシアター京都のその他の自主事業と緩やかに接続できることがあれば、ワークショップの中身に組み入れていきます。今年度の取組が好評だったこともあり、受け入れ先との関係は良好に続けられ、また他施設への展開も考えられそうです。まずは1年1年と継続して“演劇の手法を使ったワークショップ”を実施します。

# アーティストレポート

---

## シニアとの時間

多田淳之介

日本の舞台芸術に関わる人ならばロームシアター京都がリージョナルシアター事業に応募されたことに驚く人も少なく無いでしょう。研修会で担当の柘谷さんからお話を伺うと、これまでシニア層に向けての活動ができていないのでリージョナルシアター事業を利用したいとのことでした。

スタートから対象がハッキリしていてプログラムも組みやすいかと思いきや、シニア層といっても、アクティブシニアから要介護の方、デイサービスに通う方、介護施設に入居している方と様々です。柘谷さんも打ち合わせでその事にはたと気づき、今回は対象を絞るのではなく、できるだけ様々なシニア層を対象にしたプログラムを実施して、今後のシニア向けの活動のためのリサーチにするという方向になりました。そして、今後アウトリーチを担える地元のアーティストの育成にも当てたいということで、ファシリテーター養成講座も開催しました。

シニア向けのプログラムは、地域のコミュニティづくりや高齢者の就労支援をされている NPO 法人地域共生開発機構ともつが月2回開催している「ともつくカフェ」でのワークショップ、左京区の左京老人福祉センターでの演劇教室、岡崎学区の社会福祉協議会の集会でのワークショップを行いました。自分にとってもシニアの方だけのプログラムはほとんど初めてで貴重な発見の多い現場になりました。

「ともつくカフェ」では日頃はものづくりの教室などをゆるゆるとやっているようで、参加人数も当日開始時間になるまで分からないということだったので私たちもプログラムはあまり固めずに利用者の方の様子を見ながら進めることにしました。利用者さんと話してみても驚いたのが、利用者さん同士は普段からお友達ではあるのですが、例えば若い頃にどんな仕事をしていたとか、詳しい家族構成、いつから京都に住んでいるのか、パートナーはどんな方か、新婚旅行はどこに行ったか、これはシニア層に限ったことでは無いかもしれませんが地域の集まりではお互いのプライベートなことはあまり話す機会がないということでした。これは今後もシニアの方とのプログラムに活かせる発見でした。

福祉センターでの演劇教室の参加者はまさにアクティブシニア。開始前にジャージでストレッチしながら待っている方もいるほどで、やはりシニアといっても一言では括れません。こちらでも参加者の方々は顔見知りですがプライベートなことまでは知らないということだったので、演劇を作りながらお互いの話ができるようなプログラムにしました。どんなワークショップでも終わった後に少しでも人との関係や世の中との接し方が変わることを目標にしているので、今回様々なシニアの方が対象でしたが、共通してお互いを一歩踏み込んで知ることによってコミュニティの中での関係が広がり深まることを目標にしました。

岡崎学区の集会では参加者の年齢層が一番高く、歩いて会場までは来られる方々ではあるのですが、ゲームのルールを理解するのが難しい方も少なくありませんでした。ワークショッププログラムの多くはルール設定がそのワークの面白さを担保していることが多いのですが、だからと言ってルールが理解できないと参加できないわけでは無く、今この場を楽しむということができれば良いということも今回貴重な発見でした。最後に 20 歳の頃の自分に神様が声をかけるとしたらというお題でセリフを考えてもらったのですが全て感動的だったことは言うまでもありません。

ロームシアターでは来年度もシニア対象のアウトリーチを継続することになったそうで、シニアの方々が生きてきた時間と、今この時間が愛せるような活動が続いてくれることを願っています。



令和5年度リージョナルシアター事業報告書

発行・編集：一般財団法人地域創造

発行日：令和6年6月

